

見学レポート

2012年11月27日見学

千葉大学アカデミック・リンク・センター

千葉大学アカデミック・リンク・センターは、「アクティブ・ラーニング・スペース」「コンテンツ・ラボ」「ティーチング・ハブ」の3つの機能の実現によって、学習とコンテンツの近接による能動的学習の促進を実現するため、2011年4月に設置された。

今回は「アクティブ・ラーニング・スペース」を中心に、新設の「対話する図書館」N棟を案内いただいた。



人員構成

[→サービス事例集 p.70 参照]

図書館の職員は、図書系（経理・庶務以外）12名、非常勤（カウンター・ILL など）15名が業務に就いており、夜間土日については業務委託を行っている。

アカデミック・リンク・センターには所属の教員があり、中には兼務の教員もいるが、専用の予算がついているため、プロジェクト特任教員が所属している。

スチューデントアシスタントについては、2011年度より学習支援に16名、2012年度より技術系業務の支援に17名、図書館業務の支援に11名が配置されている。

特色ある取り組み



●リエゾン・ライブラリアン

前後期科目が70科目程ある中、職員1名あたり7～8科目を担当し、各科目・教員担当のリエゾン・ライブラリアンとして、主題に特化したサービスを展開している。

●授業資料ナビゲーター

リエゾン・ライブラリアンの活動として、教員と連携し、授業の各科目で参考となる資料やデータベースを掲載した、授業のためのパスファインダー「授業資

料ナビゲーター」を作成している。

「授業資料ナビゲーター」掲載の資料は「貸出用」と「閲覧用」のオリジナルの帯を貼付し、2冊ずつ用意、必ず1冊は館内で利用できるようにしている。これらの資料は、「授業資料ナビゲーター」の設置されたパンフレットスタンド側のブックツリーに配架されている。配置場所コードは変更しており、資料にはICが入っているため、手に取られた頻度を計測できるようになっている。



●1210 あかりんアワー

アカデミック・リンク・センター入口のプレゼンテーション・スペースにて、学生・教職員の研究やおすすめの本などを12:10からの昼休みの時間を使って紹介してもらう、セミナーを開催している。1210 あかりんアワーで紹介した資料は、ブックツリーにてセミナー時の写真と併せて展示を行っている。

施設・設備

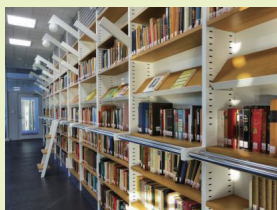
●プレゼンテーション・スペース

アカデミック・リンク・センターのゲート外の入口に隣接する、前方に大型スクリーン・階段状の客席スペース。建物の外側がガラス張りのため、通行人にも注目される仕組みとなっている。図書館側からの依頼による音出し以外の音出しは禁止であるが、予約で盛況とのお話。イベント時に多いときは1回あたり80人、出入りしている人数を含めると100人を越えるときもある。



●ブックツリー

見せる工夫が行える書架。ように4面でできている。新着ワー、授業資料ナビゲータの資



N棟の左右の階段を囲う図書展示やあかりんア料などを配架している。



●グループ学習室・研究個室

予約制としているが、空室であれば利用可。個人研究個室は大学院生、教員のみ利用可としている。

●学習支援席

2Fの可動式イスと机のあるアクティブ・ラーニング・スペースでは、大学院生による分野別学習相談、教員によるオフィスアワー、図書館職員によるレファレンスサービスが行われている。これらの学習支援も利用者席同様、可動式のイスと机を使用しており、話しかけやすい雰囲気が感じられた。



●館内について

飲食については、蓋付きの飲み物の持ち込み、館内での飲用は可。校内の食堂よりも図書館の開館時間が長いため、滞在型図書館の役割も果たしている。

館内に設置されているPCは総合メディア基盤センターが管理を行っている。またノートPC、iPad、プロジェクタ、電子辞書は図書館内にて貸出を行っている。

館内は学生たちの意識の中で、自然にゾーニングされているとのお話であった。PC禁止ゾーンでは、学生同士で注意し合っているとのこと。能動的にグループなどで学習に励む学生たちの姿がとても印象的であり、学習に対する意識の高さが感じられた。

最後に

「千葉大学附属図書館本館利用案内」をご覧になったことはあるだろうか？こちらに記載されている2つの絵には違いがある。片方の絵にはリンゴが木になっており、もう一方はリンゴが木から落ちてきていることに私たちが気づいたように、アカデミック・リンク・センターを使った後、何か発見や気づきがあれば、という願いを込め学生支援を行っている、といった職員の方のお話が非常に印象的であった。それが実際に感じられる図書館であった。

2013年5月24日見学 東京女子大学図書館

東京女子大学図書館は、1996年に新築された、1学部4学科・大学院2研究科を対象とした総合図書館だ。2007年度に1階を中心とした改修を行い、メディアスペース、コミュニケーション・オープンスペース、プレゼンテーションルーム、リフレッシュルーム等、学生のニーズに対応した空間を新たに整備している。

中庭「croSS 広場」に面した1階フロアの側面はガラス張り。館内から木々の緑や、移動・休憩している学生達の姿が目に入り、自然光が差し込む明るい空間だ。また、館外からも館内で学習・読書を行う学生の様子を伺うことができ、壁を感じさせない開放的な図書館となっている。

改修を行った2007年度より、学生支援GPに採択されたプログラム「マイライフ・マイライブラリー」を実施。“学生の潜在的な力を引き出し、知的探求の拠点となる「滞在型図書館」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備するプログラム”だ。情報リテラシー講習（ガイダンス）、基礎的日本語能力養成講習等の学習支援講座も開催されている。

施設改修というハード面、学生アシスタントの活用・各種学習支援活動プログラム開催といったソフト面、両面が調った図書館だ。



飲食可能リフレッシュルーム

基礎的日本語能力養成講習

学習支援として、「基礎的日本語能力養成講習」を開催し、『～混ぜるなケン！～「話しことば」と「書きことば」』『わたし』をプレゼンテーションすることば』の2講習を館内プレゼンテーションルームで実施。

『わたし』をプレゼンテーションすることば』については就職活動の際にも参考になる内容のため、キャリア・センターでもチラシ・申込用紙を配付しているという。現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代 GP）に選定されている、総合的キャリア構築支援「東京女子大学キャリア・ツリー」との関連性を持たせることも意識されているとのこと。大学全体として、学生の学習・研究・キャリア支援をされている。

2講習とも定員20名で、半期に2回ずつ、年間で計160名が参加可能。前期の定員は見学時の段階で既に埋まっているとのことで、盛況の様子が伺えた。

学生アシスタント

●ボランティア・スタッフ

図書館の利用案内を行なっているボランティア・スタッフのメンバーは、見学時で計38名とのこと。スタッフは館内で「ボランティア・スタッフ優先席」という閲覧席を利用し、滞在時に気軽に声かけられるようになっている。

また、OPAC専用PCの上に「ボランティア・スタッフ勤務中」という札を置いたり、カウンターで活動フロアを掲示したりすることにより、存在を利用者に周知している。OPAC上の案内掲示は、学生によ



「ボランティア・スタッフ勤務中」POP

る提案とのこと。学生の目線ならではの細やかな工夫だ。「学生から出されたアイデアで、すぐにできることはすぐに実行するようにしています。」という言葉の通り、学生アシスタント同士、またスタッフと学生アシスタントの意見交換が活発であることが伺えた。学生の意見を吸収し、実際に反映させていくことで、帰属意識を高めているという。



展示コーナー

学生が参加する選書ツアーでは、選んだ図書のカバーに請求記号を記入して展示し、選定した学生による書評のポップも作成。特に優れた作品には図書館長賞を授賞されているとのこと。見学時は歴代の図書館長賞授賞作品の展示を拝見できた。

● サポーター

サポーターは、館内の利用案内の他、返本・書架整備作業を行いながら館内の利用案内等を担当する学生アシスタント。今年度は定員 32 名のところ、約 90 名もの応募があり、申込み開始後、数秒で定員に達してしまうほどの人気とのこと。学生アシスタント制度の認知度の高さが伺えた。

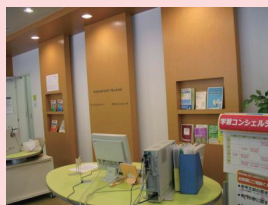
また、返本作業を行なうことで「どのような資料が人気か、授業に役立っているか」ということを把握でき、新たな本との出会いが生まれているという。他学生が利用した資料に触れることができることは、サポーターにとって貴重な経験となっていることだろう。

なお、同館では、利用者が館内で閲覧した資料は書棚に戻さず返本用ブックトラックに返却する方法を取っていて、返本用ブックトラックに戻された資料を職員が毎日ハンディターミナルで読み取り、館内利用数の統計を取っているようだ。

● システム・サポーター

1階の「アシスタント・アイランド」という一角で、館内における情報機器端末の使い方や、トラブルへの対処を担当している。メンバーが情報共有に利用しているメンバーリストには、情報処理教育関係の教員も含まれているとのこと。

メンバーの発案で、マニュアル（Q&A集）を作成したこともあるようだ。全ての学生アシスタントの声を活かし、サービスを日々改善されていることが感じられた。



アシスタント・アイランド

● 学習コンシェルジュ

大学院生が「アシスタント・アイランド」で学部学生の質問に対応し、学習の支援を行っている。卒業論文に関する相談は指導教官を聞き、教員に相談内容を報告しているようである。

また、授業内のガイダンスも担当しているとのこと。学習コンシェルジュをしていた大学院生が現在大学の非常勤講師となり、担当クラスの学生に対する情報検索ガイダンスを希望するという連鎖も生まれているという。

学生アシスタントへの応募理由は、「自分が学生アシスタントにお世話になったから」というものが多いそうである。学生の力を借りて学習支援をすることによって、学生がアドバイザーの立場になり、アシスタント自身の成長が促されている。図書館が学習を支援するとともに、学生個人の成長を支援する場となっていることが感じられた。

2013年5月24日見学 武蔵野プレイス

武蔵野プレイスは2011年にオープンした図書館機能も備えた武蔵野市の複合機能施設。様々な目的で訪れる幅広い年齢層の人達が、活動を通して時間を共有する快適な「場」となるよう工夫され、従来の意識を打ち破った様々な試みで全国的に注目を集めている。武蔵野プレイス館長の三澤和宏さんからお話を伺い、館内を案内して頂いた。

複合機能施設とは？

「複合機能施設」と称する武蔵野プレイスは、図書館機能のほかに、生涯学習支援機能、青少年活動支援機能、市民活動支援機能という4つの分野を支援する機能を併せ持っている。

これらが単に集まっているだけでなく、お互いに融合したり刺激し合って「機能」することで、各機能が活性化することが意図されている。多様な市民が自然に集まる地域コミュニティの基盤となる場＝プレイスを目指したということ。

駅前という立地の良さもあり、オープン以来入館者数は増え続け、80万人程度と見込んだ年間入館者数は、150万人を超えた。22時まで開館していることでサラリーマンも利用しやすく、各年齢層にほぼ均等に利用されているそうだ。私達が訪れた平日の午後、赤ちゃん連れの母親から、学生、年配の方々まで、幅広い年代の人達がそれぞれの場所で思い思いに過ごしている様子がうかがえた。



回遊式で出会いの連鎖を演出

館内を巡っていると、空間から空間への移動がスムーズにできて、館内を自然に回遊している気分になる。街路や広場をめぐる歩かのような感覚で、自分の居場所を見つけたり、思わぬ発見や出会いの連鎖で活動が活動と呼ぶ「場」となるのが狙いだという。書架やテーブル、椅子などの備品がどれも丸みのある優しい形なのは、すべてが人を包み込むような空間を目指したということ。ここは建物の外観も丸くて優しい形をしている。

市民活動・青少年の交流を支援

市民活動を支援するために設けられた大小5つのミーティングスペースでは、弁当を食べながらグループで活発に話し合いをしている様子が見られた。登録団体は、専用のロッカーやメールボックス、登録団体を紹介するファイルコーナーも備え、関連資料も充実している。これなら館内での一連の活動を完結させることもできる。

20歳以上の施設利用ができない午後の時間帯だった青少年専用フロアも見学させて頂いた。ここは、ダンスや演劇ができるパフォーマンススタジオ、バンド練習用に、立派なドラムセットやキーボードを備えた防音のサウンドスタジオなどがあり、青少年同士の交流の拠点になっている。

長居したくなる図書館エリア

図書館エリアは、カフェやギャラリーなどと一体となっていて開放的。壁面書架を多く用いて広くてゆったりとした閲覧スペースが確保され、本棚の間を行き来して気に入った本を見つけたら、すぐに近くの椅子やソファで読むことができる。吹き抜ける構造で地下のフロアにも自然光が届き、明るく暖かな雰囲気。おしゃべりのできるラウンジもあって、長時間快適に過ごすことができる。

「こどもライブラリー」や「おはなしのへや」といった、子どもや赤ちゃんのためのエリアも充実していて、お母さんに連れられた赤ちゃんが、熱心に絵本に見入っていた。

図書エリアではスタッフによる本を紹介するポップが目を引き、「出会い」「発見」への働きかけが感じられた。

逆転の発想「にぎやかな図書館」

武蔵野プレイスのレイアウトで最も印象的なのが、1階エントランス前、フロアの中央にオープンなカフェがあること。カフェではBGMも流れている。中央は吹き抜けになっているため、BGMやカフェの食器の音、コーヒーなどの匂いが館内に広がることになる。シーンと静まり返った図書館ではなく、自然な音の効果を活かして、おしゃべりをして、子どもが多少騒いでも、他の来館者が気にならない「にぎやか」な環境を作り出し、居心地のいい空間づくりを演出しているという。同じフロアのギャラリーではコンサートを行うこともあるのだ。

これは例えば、町中のオープンカフェや公園のベンチなどで、お茶を飲みながら本を読むイメージ。カフェのすぐ隣にあるマガジンラックからお気に入りの雑誌を見つけてカフェで読むこともでき、夜になればお酒も飲める。



見学後、このカフェで20時過ぎまでグループでミーティングをしたが、館内を行き来する人達や、思い思いに雑誌を手に取り、眺めている人達などが自然に視界に入ること、居心地の良い開放感を味わった。

「館内静粛」や「飲食禁止」など、図書館では当然のルールだったものを緩くすることで、居心地の良い「場」を提供したかったようだ。従来の図書館では考えられない逆転の発想を持つことで、図書館に人を呼び集め、そこで自分の関心事や世代を超えた新たな「発見」「出会い」「交流」が生まれているという。

武蔵野プレイスが実現した居心地のいい「場」の提供が、人々に他者と関わろうとする心の余裕と他者への関心を生み、それが交流に繋がっていくのだろう。武蔵野プレイスが目指した地域のコミュニティの基盤となる場という構想の原点が実現されつつあることを実感した。

参考資料

- ・武蔵野プレイス パンフレット
- ・「アクションの連鎖」が起こる施設をめざして
（武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス ホームページより）
- ・「パッション」第34号 金剛株式会社
- ・「ソトコト」第15巻第5号 木楽舎

2013年7月25日見学

帝京大学メディアライブラリーセンター

帝京大学メディアライブラリーセンター(以下、MELIC)は2006年9月に新館を開館した。今回の見学では、新館建築から6年後の2012年4月から4ヵ年計画で進められている読書推進プロジェクト『共読ライブラリー』を中心に館内をご案内いただいた。

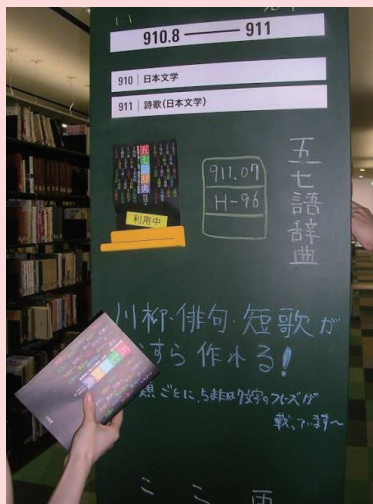
共読ライブラリー

[→サービス事例集 p.104 参照]

MELICは地下1階、地上4階建てであり、それぞれ BF:雑誌バックナンバー、洋図書のフロア、1F:貸出・返却、利用相談のフロア、2F:メディア・PC、学術雑誌のフロア、3F~4F:和図書のフロア である。

和図書のフロアでは一般書架の側板を黒板仕様にした『カスタマイズ書架』が並んでいる。

最も重要視したのは、実用性。そのため、側板を含め分類サインや請求記号もすべて取り外し可能になっていて、「いきなり出現することも」「いきなり消えることも」できる。



『カスタマイズ書架』では、職員や共読サポーターの学生からのメッセージを黒板に書いている。

これには、その棚から1冊本を選んできて、『ここにはこういう本がありますよ、どうぞ手にとって見てみてください』と気軽に紹介するねらいがあり、実際に、あまり利用されないような資料もここに展示するとすぐに貸し出されるとか。

ポイントは、『面』で展示すること！



なんとブックトラックも黒板仕様に！
使い勝手がよいので、様々な場面で活躍するそう
うだ。

プロジェクトが進むごとに、
次々に新たな黒板本棚が登場
している。
たとえば、のれんが掛かってい
る黒板本棚。
外から見たときに、全部丸見え
になっているより少し見えて
いる方が『なんだろう？』
と入りやすい。そんな視覚効果
があるとのこと。



第 15 回図書館総合展出展

2 年目となる図書館総合展出
展では昨年よりもパワーアップ
した黒板本棚を再現。

展示ブース内にて 1 日につき
3 回の「書棚ワークショップ」
が開催され、来場者は実際に共
読ライブラリーで行われている
書棚づくりを体験でき、大いに
盛り上がった。



何か新しくサービスを始めたい、という点から『共読ライブラリープロジェクト』
を参考にしようとする、規模の大きさや黒板書架のイメージから、実現するには
程遠いように感じてしまいがちだが、「もっと本と親しんでもらいたい」「そのための
仕掛けを作りたい」という「共読」の基本的な考えはどこの図書館でも取り入れ
られるものだろう。

このスタートブックが、自館に合ったそれぞれの『共読』を見つけるのに役立つ
ものになれば、とあらためて士気を高める見学となった。

2013年7月25日見学 明治大学和泉図書館

明治大学和泉図書館は、和泉キャンパスのシンボルとして「入ってみたいくなる図書館」を目指して建設され、2012年5月1日に開館した。4階建の図書館は正門を入ってすぐ右手にある。主要な利用対象は、文科系6学部の1,2年生、大学院教養デザイン研究科、教職員。人文・社会科学系の資料を数多く所蔵する。

新図書館建設の要望が出されたのが2002年。2008年に新図書館建設が決定した。その後、図書館建設委員会のもとに「図書館専門部会」が設けられ、さらに2010年、実施設計の段階において各種ワーキンググループが専門部会内に設置された。そのメンバーで全国の図書館を見学しながら、「全国40大学図書館・公共図書館のイイとこ取り」をしたという。以下ではキーワード別に、そのポイントを紹介する。案内していただいた坂口雅樹事務長による印象的なコメントも所々に記載させていただいた。



施設・設備・サイン

[サービス事例集 p.30 参照]

エントランスホール

吹き抜けが広がり、開放感がある。「木がコンセプト」というとおり、木の質感が伝わってくる。

サロン

エントランスホール左手には軽食等を提供するサロン（カフェ）がある。営業終了後は自習室等で使える。

ホール

エントランスホール右手には、扉を介して国際教養大学（秋田）及び福武ホール（東大本郷）をイメージしたというホールがある。試験期は学生に開放している。

照明

3,4階はアルミ製のルーバーで外壁は全面ガラスを覆い、熱を吸収し、適度な反射自然光が入る。また、書架の天板には2本ずつ蛍光灯をつけ、アッパーライトで間接照明に。その理由はほんのりとした明るさと地震対策である。

空調

床空調を採用。天井はよりシンプルな木ルーバーに。ガラスウォールを天井断熱に採用。

書架

地震時の図書転落防止のため、書架の棚板には4度の傾きをつけている。配架可能冊数は60万冊（うち40万冊は集密書庫）。3階フロアでは、進行方向に対して、斜めに書架を設置。すると進む動きに伴って書架が連続的に目に入ってくる。人を引き込む効果を狙っている。

時計・掲示板

館内に時計はない。入り口のデジタルサイネージにさりげなく表示されているのみ。



「あちこちに置くと時間を合わせる手間がかかるし、今はみんな携帯などで時間はわかる」。掲示板もトイレの前にあるだけで、見える位置にはない。掲示物の壁貼りもしない。必要に応じて、置き型サインやイーゼルを使っている。

館内放送

放送は緊張感が途切れるためなるべくしない。

デジタルサイネージ

49 台（うちタッチパネルは 20 台）を設置。グループ閲覧室の予約状況や、貸出用 PC ロッカーの空き状況、イベント案内など、リアルタイムで情報が反映される。

サイン

「BOOK MARK」をコンセプトにした、シンプルかつ目を引くサイン。トイレサインなどは絵文字サイン（ピクトサイン）であり、採用に際して図書館女性職員の感性が生かされた。



利用・サービス

地域開放

20 歳以上の杉並区民は利用できる（貸出も可）。世田谷区民からも要望があり提携を結んだ。杉並区民の利用は 1%とそこまで多くはない。また、1 月 7 月の試験期は入館できない。

睡眠

滞在型図書館を目指し、随所に快適な仕掛けが。「寝てもいい図書館。起きたら勉強してもらう」

飲食

飲食に関してはペットボトルのみ許可している。「人に迷惑をかけなければ何をしてもいい」という。食事は原則禁止にしているが、やや緩い感じである。

「さばけた図書館なんです。係員のエネルギーを無駄な労力を使うなら別の仕事をしてほしい。」

ブックシェアトーク

グループ閲覧室で、本という媒体を使って学生どうしが出会い語りあう場を提供した。現場には学生目線に近い若いスタッフが立ち会う。図書館が人をつなげることができるという好例といえるだろう。

カウンターサービス

同館には「サービス＝おもてなし」という姿勢がある。目線を合わせるために、カウンターでは立ってサービスをしている。

省力化

ノート PC の貸出にはロッカーを使用。グループ閲覧室の予約もすべて Web から。なるべく人手をかけない。また積層集密書庫（ブックタワー）6 層に排架している発禁本コレクション等の出納以外はすべて開架なので、出納業務はほとんどない。



最後に

「職員が元気になることで、利用者が元気になる。成功者はすべてこの順序で、この逆はない。職員同士で話すときも冗談を言い合ってリラックスする。職員のモチベーションが上がるのが図書館運営の最高の薬です」。

2013年7月25日見学 芝浦工業大学豊洲図書館

芝浦工業大学豊洲図書館は2006年4月に港区芝浦キャンパスから江東区豊洲キャンパスへの移転とともに開設された。地域開放が移転の条件だったこともあり、地域との連携を推進している。キャンパスには外と敷地を隔てる壁はなく、近隣住民が自由に入ることができるようになっている。その敷地の中でひときわ目立つ、凱旋門のような形をした「研究棟」の8階に豊洲図書館がある。以下にその館内をご紹介します。

赤丸コーナー



赤丸コーナーと企画展示

図書館入りロゲートを入るとすぐに目に入るのが、「赤丸コーナー」である。ソファラックが円型に配置されたこのコーナーでは、新着や企画展示などの図書がディスプレイされていて、本を手に取り、そのままソファに座って読むことができる。モノトーンを基調としたシンプルなデザインの館内で、このコーナーは特に注目を集める空間となっている。展示資料には、館員手作りのポップで図書の紹介をすることで、注目を集めるコーナー作りがされている。

視聴覚コーナーとグループ学習スペース

赤丸コーナーの奥には可動式の机と椅子が並び、閲覧席と視聴覚コーナーがある。

閲覧席はグループ学習に使用されるほか、図書館主催の説明会などを行うこともあるという。建築作品を持参し、高さを変えられる机を利用してプレゼンをする学生など利用方法はさまざま！

視聴覚コーナーには大型のディスプレイと動かせるソファが備えられていて、何人かで一緒に見ることができる。ちなみにコーナーの奥側の窓からはスカイツリーが見えるそう！



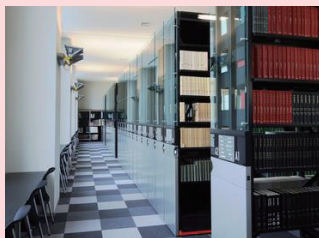
視聴覚コーナーと閲覧席

閲覧席と所蔵資料



閲覧席中央の様子

館内はワンフロアを活用した広々とした空間となっている。仕切りは無く、館内中央の閲覧席周りには3段と低いものを設置しているため、館内が広く見渡せる。更に天井の高さも4メートルほどあり、片面が全面窓なので開放感がある。背の低い書架の上では大型資料を広げて見ることができる。また、通路を挟んで工学系の専門書架があり、それぞれの棚一段の高さは、建築系



集密書架：企業の社史も充実している

に多い大型資料を縦に収納できるよう高めに設定されている。閲覧席の奥には集密書架があり、雑誌のバックナンバーも数多く保管されている。

学生アンケートの結果を受けてワンフロアになったということだが、資料を集約でき、上下階への昇降が不要なので移動しやすいのが利点である。コンパクトではあるが、必要な機能がまとまって備えられている印象だった。

資料については、主な利用者が工学部の学部学生と大学院生であるため、工学系の専門的な資料が充実している。専門雑誌の他、データベースの他、データベースの導入も積極的に進めている。データベースや図書は研究室で利用されることも多いそうだ。

茶室 芝浦庵

[→サービス事例集 p. 16 参照]

豊洲図書館の最も特色あるスペースを紹介したい。館内中央の一角にある和室の閲覧室「茶室 芝浦庵」である。畳スペースを設けている図書館はあるが、茶室は珍しいのではないだろうか。炉や水屋、床の間などが備わる本格的な造りである。

ももとは「茶室おこし絵図集」のような大型の資料を広げて見るのに畳が良いのではないかと、という利用者の声を受け、新館建築の際に和室を希望したところ、建築家から茶室が提案されたそうだ。移転前の図書館では大型の資料を見る際に、床に広げて座って見ている学生が多かったそうだが、ここでなら大型の資料や巻物などの長い資料も広げられ、ゆっくり座って見ることができる。また、一人暮らしの学生からも畳はなごむと好評のようである。

部屋の特徴を活かして、学生サークルのお茶会などのイベントにも活用されている。閲覧席との境目がガラス張りなので、ふらっと立ち寄った来館者にもイベントの様子が見え、興味をもってもらえるそうだ。中の様子は見えるが音は気にならないので、イベントが行われない時はグループ学習スペースとしても使用されるなど、多目的に活用されている。予約も不要なため、気軽に利用することができる。

茶室は、図書館全体のモノトーンで近代的な印象とは対照的だが、不思議と調和しており、豊洲図書館の中で象徴的な場所になっていた。



茶室から閲覧席を望む

芝浦工業大学豊洲図書館では、学生アンケートなどから利用者の声を積極的に取り入れた図書館づくりがされていた。また、職員の方々が普段から学生をよく見てニーズを把握しようとしている様子が感じられた。

大宮キャンパスの図書館では学生と連携し、サークル紹介と関連図書を展示する企画展示を定期的に行っているそうだが、豊洲図書館も他部署や学生と連携して、継続してできるイベントを今後企画したいということだった。新たなサービスを行う際に大切にしているのは、やはり「コミュニケーション」とのこと。連携する学生のほか、他部署の職員や教員とは、普段からできるだけコミュニケーションを取って信頼関係を築いておくことが、サービスを成功させる秘訣であるといえそうだ。

2013年9月24日見学

和光大学附属梅根記念図書・情報館

和光大学附属図書館は、大学創立時に発足後、1984年に地上4階・地下1階の「和光大学附属梅根記念図書館」として開館。さらに2009年に情報センターが統合し「和光大学附属梅根記念図書・情報館」となった。学生の多様な学習スタイルに対応した施設となるよう、2009年には3階フロアを改修されている。

コミュニケーション・ゾーン

〔→サービス事例集 p. 32 参照〕

メインエントランスがある3階をコミュニケーション・ゾーン、その他のフロアをスタディ・ゾーンとすることで、音のゾーニングをされている。

3階コミュニケーション・ゾーンにはイートインスペースのほか、PCが設置されているメディアサロンや、情報機器を利用したプレゼンの練習等が可能なプレゼンテーションルームが整備されている。

イートインスペースでは軽食・ペットボトル飲料などの飲食が可能となっており、館内の滞在時間の増加に繋がっているという。図書館資料、図書・情報館貸出PCの持ち込みは不可だが、すぐ隣のフロアがラウンジとなっており、一般雑誌や旅行ガイドブックなど軽めの資料を読むことができる。部屋の扉は常に開かれているが、騒音や臭いの苦情は出ていないとのこと。

人の出入りが頻繁なエントランスの近くにコミュニケーション・ゾーンを配置し、他階をスタディ・ゾーンとして静謐なエリアを確保することで、目的に適した学習環境の選択が可能となっている。



イートインスペース前のラウンジ

Let's Read Project

〔→サービス事例集 p. 60 参照〕

『Let's Read Project』は、学生が中心となり、本にまつわる多様なイベント・活動を行うプロジェクト。館内にはメンバー専用の「LRP ルーム」という小部屋があり、活動の際に利用している。利用時は「開室中」の看板を出し、ドアを開けて、活動を見学できるようにしている。自由に入室できるようにすることで、メンバーではない学生との交流も生み出されるという。



LRP ルーム開室時の看板

●見学ツアー

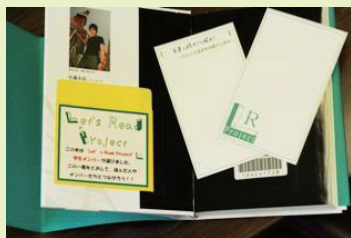
学外に出て、図書館や書店を訪問する見学ツアーも実施。今年度は代官山蔦屋書店を見学し、和光大学卒業生のスタッフにご案内いただいたそう。学生時代に図書館や書店の裏側、またそこで働く社会人や卒業生の姿を見ることは、メンバーにとって良い刺激となっていることだろう。

●選書ツアー

毎年実施している選書ツアーでは、選んだ図書の選書理由や、所蔵すべき理由をプレゼンし、購入の可否について1冊1冊合議を行なっている。開始当初は現在より選書冊数を多く設定していたが、学生が選書に時間をかけている様子を見て、負担にならない冊数にされたようだ。ただ闇雲に購入するだけではなく、1冊1冊が吟味・厳選されており、その本への思い入れや、購入動機が強いことが感じられた。

個人で自由に選書する他、分野ごとにメンバーを分けたグループ選書も行っている。グループで選書することにより、メンバー同士の交流が促され、先輩が後輩へアドバイスしている姿も見られるとのこと。

また、選書ツアーで購入した図書の展示、ポップやポスターの作成もLRPメンバーが実施している。選書ツアーで購入した図書には、学生が自由に感想を記入できるよう、見返しに感想カードが付されている。「本を通して人と繋がりたい」という思いを形にするため、とのこと。小さな工夫だが、本を通して人との繋がりを生む、見事な仕掛けだ。



選書した本に付けられている感想カード

『本を読もう!』・『本を楽しもう!』コーナー [→サービス事例集 p.84 参照]

『本を読もう!』は教員が学生に読んでほしい本をまとめた冊子。数年に一度発行されており、オリエンテーションの際に、新入生全員に配付しているようだ。

また、『本を読もう!』の職員版として『本を楽しもう!』も作成。図書館職員だけではなく、他部署の職員もオススメの本を紹介されているとのこと。紹介されている本は『本を読もう!』・『本を楽しもう!』コーナーにまとめて配架されており、貸出も可能。



本を楽しもう!コーナー

『本を読もう!』については、寄稿がある教員の学部により偏りがあるという課題もあったが、館内で教員へ直接声を掛けて依頼することにより、大分改善されたとのこと。図書館と情報センターが統合されていることを利用し、情報センター部門の職員にも声掛けをするよう依頼されたようだ。他部署と協働することで、図書館をあまり利用されない教員へも呼びかけが可能になったという。

きっかけづくり

館内の掲示物には、学生から募集した「ワコボン☆」「ワコ次郎」「ワコちゃん」といった図書館キャラクターが多く使用されている。また、主人公が大学生の図書を集めたコーナーを設置したり、文庫・新書コーナーの一角に図書館オリジナルブックカバーやしおりを置いたり、細やかな工夫が随所に施されている。『少しでも学生が読書・図書館に興味を抱ききっかけとなるように』という意識が感じられた。



オリジナルブックカバー・しおり

2013年9月24日見学 相模女子大学附属図書館

相模女子大学附属図書館は、創立90周年を記念して1992年に竣工された。20年以上経過しているようには見えない新しさを感じさせるコンクリート造りでモダンなデザインの図書館である。この図書館の特徴をポイントごとに紹介していきたい。

和室閲覧室

〔→サービス事例集 p.14 参照〕

図書館の一角に、和室閲覧室がある。12畳の和室には、座卓が二つ置かれている。窓からは外の木々が見え、明るい光が差している。かなり居心地がよいのだろう、見学時もこの部屋には絶え間なく学生たちが出入りし、思い思いに過ごしていた。居心地がよすぎて、寝転がってしまう学生がいるらしい。和室の周りには扉があり、閉めきることもできるそうだが、今は一部取り外され、常に開放されているため、気軽に入りやすい雰囲気がある。

ここでは、会話や、蓋付飲料以外の飲食はできないが、利用目的については制限していない。学習だけでなくサークル活動など多目的な利用も許可されているようだ。

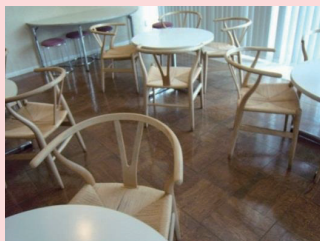


和室閲覧室

会話と飲食が可能なラウンジ

〔→サービス事例集 p.12 参照〕

滞在型図書館を目指すこの相模女子大学附属図書館には、会話や飲食が可能なスペースも設けられている。「ラウンジ」と呼ばれるそのスペースも竣工当初に設けられた。ラウンジには、自動販売機、水道、ゴミ箱が備えられ、座り心地の良い椅子がある。複数はもちろん、一人でも食事を取りやすい。ここも学生にとって心地よい居場所となっている様子。



ラウンジの奥には一人掛けの席もある

設置のきっかけをお聞きしたところ、渋谷の松濤美術館にあるカフェをヒントに「図書館にもこんなスペースがあったらよいのでは」という職員の方の意見で設けられたそうだ。

持ち込む飲食物には制限がなく、汁物なども持ち込むことができるが、汚損防止のため館内資料の持ち込みは禁止している。ここはエレベーターホールのある仕切られた部屋なので、閲覧室へのおいや音の漏れはなく、床はフローリングなので、汚れも目立たないような造りになっている。

学習スペース

次に学習スペースをご紹介します。相模女子大学では閲覧室のほかに、ラーニングコモンズとして3つのグループ閲覧室を備えており、ノートパソコン、プロジェクタ、スクリーン兼用のホワイトボードの貸出を行っている。グループ閲覧室はガラス張りで個

室となっているため、ゼミや図書館のガイダンスで使用することも多いようだ。そのほかに、5名まで入室できる共同視聴室が2部屋あり、そこでは視聴覚資料を利用しながらのグループ学習ができる。

パソコンを使用した学習ができるスペースとしては、パソコンコーナーと呼ばれる部屋と、ラウンジ、各フロアのエレベーターホール周辺がある。ホール周辺は人通りが多いのだが、利用者も意外に多くいて、周りに音がある方が集中できる学生にとっては人気の場所のようだ。



エレベーターホールのパソコンコーナー

学生サポーター

学生との活動についても触れてみたい。相模女子大学では、積極的に学生と協同して、様々な取り組みを行っている。その一つが「学生サポーター」と呼ばれるボランティアの学生たちである。2013年9月現在27名が登録しており、図書の配架や新着図書コーナーなどのポップ作成に加え、今年度は選書ツアーもおこなったとのこと。学生サポーターになるには、特に制限などはないため、部活と掛け持ちしている学生もいるようだ。訪問した際には、選書ツアーで購入した図書が企画展示となっており、各自選書した図書にポップを付けて紹介していた。選書ツアーの展示本のうち、何冊かは既に貸出中で、同じ学生の目線で選んだ図書は人気があるようだ。



選書ツアーの企画展示



新着図書コーナー

学生サポーターの募集方法とそのコツをお聞きしたところ、新年度の図書館ガイダンスの最後に活動を紹介し、サポーターをしている学生に直接話をしてもらったところ、認知度が上がり、希望者が増えたのだという。

学生サポーターのほか、図書館報「さがみ」の企画編集を学芸学部メディア情報学科の学生に任せると、相模女子大学ではサービス面において学生の参加が目立っていた。

相模女子大学附属図書館は居心地の良い空間作りを先駆けて行っている。滞在型図書館を実現するには、居心地の良さは重要な要素である。最近は量の閲覧室や、会話や飲食が可能なスペースを設けている図書館は多いが、20年以上前から設置している大学は珍しいのではないだろうか。

新しいサービスを実施するにあたって反対はなかったかという質問をした際の「何かを始める時は、まずやってみて、問題が出たらその時に変えればよい」という言葉が印象的だった。始める前にリスクを考えることはもちろん大切だが、まずは始めてみるということが、新しいサービスを生み出すことに繋がり、そこから図書館の活性化に繋がるのではないだろうか。相模女子大学の活気ある図書館を見せていただいてそう感じた。

コラム③ 24時間開館を導入して

東海大学代々木図書館では2004年度から24時間開館を実施しています。夜間から早朝は身分証による個人認証で出入りし、図書の閲覧、貸出返却などができます。

職員不在時の対応として9台のカメラで24時間録画し、守衛所からの監視を行っています。当館は2フロアの小規模な館で、利用者は当キャンパス所属の法科大学院生と教職員に限られているため、幸い大きな問題はありますが、円滑な運用には学生のモラルに頼る面もあります。

入退館システムなどの導入費用は法科大学院開設時の補助金で賄われましたが、24時間照明や機器を稼働させるため光熱費がかかりますし、エアコンの修理が早い段階で必要となるなど、メンテナンス費用がかかるといったデメリットもあります。しかし学生にとっては24時間図書館を利用できることは、やはり大きなメリットです。学部学生や、他キャンパスの学生からも要望がありますが、社会環境や学生のモラルが大きく変化している中で、更にサービスを継続・拡大するか、中止するかは、費用対効果もふまえながら今後検討されることになるでしょう。



入退館システム
カードリーダーに身分証を通すと、
ロックが解除されドアが開く

コラム④ 始めることに含まれるもの

本冊子では「はじめてみよう！図書館サービス・スタートブック」ということで、サービスを「始める」ときに焦点をあてて調査を実施しました。この際、例えばサービスを「やらない」といった視点や意思については、直接の調査対象とはしませんでした。

しかしながら、サービスを始めて続けていくためには、当然、限りあるさまざまなリソースを駆使することになり、それに見合った効果や成果が問われます。そのため、サービスは常にそれを「変える」視点や「やらない」視点とどこかで接点を持ち続けているはずです。あるサービスを縮小したり廃止したりすれば、それに投入していたリソースを別のサービスに振り向けることができます。

調査では、どんなきっかけで始まったのか、どんな工夫や苦労をしたか、また今後の課題などについても回答をいただいております。これらの回答に、始めて続けるだけに留まらないさまざまな観点のせめぎあいを読み取ることができると思います。それぞれのケースにおいてどんなせめぎあいがあるのか、そんな観点からも事例集をご活用いただけたら幸いです。